

## 特集に当って

長田 洋

コンピュータで検索や処理が可能なデータの集合体であるデータベース(Database)は抄録紙など印刷物の副産物として生まれ、あるいは統計処理をはじめとする大量データの解析のために作成された。今から約20年前のことである。データベースとして新しい形態をとった情報は、その後コンピュータ技術と通信技術の発達さらに情報産業の振興にともない米国を中心に発展をとげた。特に70年代に、オンライン検索が可能になると急激な利用増加がもたらされた。

日本では海外の先進国に遅れること10年、1980年にICASと呼ばれる国際コンピュータ通信サービスの開始により、ようやくデータベースの本格的な利用の時代に突入したといえる。

これらのデータベースには文献抄録を中心とした文献データベースと統計データなど数値データを主とするファクト・データベースの2種類がある。それぞれデータベースの性格、特質が異なりそれに適した活用を心がけねばならない。

本学会員からも日常の情報収集や分析にデータベース利用の必要性が聞かれ、その効果的な活用法についての解説が望まれていた。そのようなニーズに応えるために本特集は企画された。

おさだ ひろし 旭リサーチセンター

まず「データベース・サービスの現状」ではデータベースに関する概説と現在日本で利用可能なデータベース・サービスが紹介されており、広範な情報収集を行なう際のガイドブックとしても有用であろう。

「経済データベース」では数値データベースの代表であるマクロ経済データベースとその高度な計量分析モデルと産業連関表の利用などが述べられている。

「エネルギー経済のためのデータベース」ではエネルギー経済の諸問題を研究するために必要な各種データベースが解説されている。

次に企業の財務分析や経営診断に用いられるマイクロ経済データベースの例を「財務データベース」でとりあげている。

以上はORワーカーにも比較的なじみやすいデータベースであるが、最近急速な利用増大をみている文献データベースについてその発展の経緯とデータベースの構成、検索方法などを「文献データベース」にてわかりやすく解説していただいた。

今後、研究者、企画・調査担当者、管理部門、営業部門のスタッフなど職種を問わず、データベースの利用層も広がるであろう。そして迅速かつ的確な情報収集にデータベースを大いに活用すべきであろう。そのために本号が一助となれば幸いである。

呼ばれるこれら提供者は、多くのデータベースを買い集め、大規模オンライン・システムにより高度な検索手段を提供している。このような姿については、本特集中の長田氏の論文にゆずりたい。一般に利用可能な文献データベースは世界に1000のオーダーで存在すると思われ、米国や欧州で権威あるディレクトリーも出版されている[3][4]。また、特に著名でわが国で利用度の高い文献データベースについては、他にくわしい解説があるので参考にされたい[5]。

### 参考文献

[1] 稲葉安養子ほか：講座：シソーラス，情報管理 Vol.20, No.1~12(1977~78)

(12回の連載もの。第1回は総論，2~10回は代

表的なシソーラスの各論。11, 12回は種々の利用実験を含めた考察)

[2] 小野寺夏生：“Bibliostatistics”—情報現象の統計学的説明 情報管理 21, 10(1979), 782-802

[3] Williams, M. E.(ed.): *Computer-Readable Data Bases: A Directory and Data Sourcebook. 1982 Edition.* Knowledge Industry Publications, Inc., 1982

[4] *Eusidic Database Guide. Learned Information, Oxford, 1980*

[5] 中井 浩ほか：講座：データベース，情報管理 Vol.23, No.1~12(1980~81)

(12回の連載もの。第1回は総論。2~11回は代表的な文献データベースの各論。第12回はオンライン検索の展望。)